

# 「TMS研究」のISSN認定に寄せて - TMS研究会の歩み -

持田由幸 (神奈川大学)

最近、“ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム”と題する講演会や、座談会を開催する案内が割りと頻繁に見受けられる。これも、日本人の受賞者が増えた事によるのであろう。諸先生同様にTMS研究会の初期のメンバーも独創的な研究意欲に燃えていた。この脈流は現在も衰える事がない。TMS研究会の発足の当初は熱測定関係が主であった。これは、意気投合した構成メンバーからやむを得ない事であろう（この事は未だに尾を引いている）。従来の講演内容、発表形式、講演時間に捕らわれず、講演中も討論する自由形式の講演会を現在も若さが衰えない福井大の伊佐公男先生等が提唱した。この自由度は、現在でも同じであり、討論中は辛辣な意見が飛び交っている。第1回は福井大で行われたと聞いている。熱によって発生するガス種の放出過程を天秤による試料の重量変化を測定していた世界は、質量分析計（四重極）とのハイブリッドブリッド化により、発生するガス種も測定可能となって急速にこの分野が発達し、今まで曖昧であった現象が次々に明らかになった。新しい方法が出現すれば、分析機器としての新たな問題が生じる。熱測定機器と質量分析計を継ぐインターフェイスが大きい問題となった。GC/MSも同様で、これ等の討論が活発に行われた。これらの討論がテーリング状態になった時期に、エドガー・パレスの前衛的諸作品（イオン化など）や、イタリアで活動した未来派（マリネッティ等）のいわゆる我々にとって「騒音音楽」そのものを登場させ、強引にこの分野に確立すべき発表が独断的に行われた。本来の討論会から外れた中だるみ状態の時に、質量分析でのノーベル受賞者が2名選出された。TMS研究会に、関係した、John B Fenn先生が居る。その陰の功労者がTMS研究会現会長の山下雅道先生であった。タイミング良く質量分析学会誌のTMS特集号を能美隆等によって編集中であった（この頃は日本質量分析学会TMS部会（以後TMS部会）とTMS研究会との明確な線引きがなく、多くの委員は掛け持ちであった）。TMS特集号が急遽ノーベル賞特集号に変更された。多くの委員が駆り出されて、原稿の執筆依頼や、編集、資金集めに忙殺された。一段落したら、John B Fenn先生が来日（TMS研究会が招聘）するので、その講演会の準備にまたもや忙殺された。成

蹊大学（Fensllou & Cotter夫妻の講演会もここで行われた）、東京大学を手始めに各地の講演会場を設定した委員（主催者）の苦労は並大抵でなかった。この頃は、TMS研究会としての討論会は開く余裕がなく、TMS部会との相乗りで行われた。とにかく、二人のMS従事者からノーベル受賞者の影響が大きく以後のTMS研究会の討論会の講演題目もMS関係が多くなった。このころから、一部のMS学会員から、“TMS部会となれ合いだ”と陰口を叩かれた。TMS研究会にも研究業績が認められて多くの方が何らかの賞を受賞している。前川摩耶、平林由紀子、津越敬寿、有井忠、木村隆良、伊佐公男等である。弱小の研究会にも拘わらず、多くの受賞者が居る事は誇りである。MSの研究方針の目標が曖昧であった私は、TMS研究会に何となく取り込められ、MSの基本を主に討論し、質疑応答の激しい研究会の熱情に感動し、勉強させて頂いた。2012年にIMSCが日本で開催されるニュースが飛び込んだ時、若手中心に“我々も海外で発表しよう、手始めに隣国の韓国“TMSの部会と研究会としては初めての事であった。その後、アク強く、個人プレーで種々講演会が強行され方々から批判された。色々問題があるが、このようなエネルギーも必要であり、TMS研究会も結構、今までワンマンで行われたが、活性化に寄与していた事を思うと、このエネルギーも失いたくない。来年は7年に一度行われる諏訪の御柱祭りである。諏訪の“諏は広く謀ること、”訪“は大勢に謀ることであり、独裁、独占しても御柱やメドデコに乗っても引きずり落とされてしまいます。氏子のエネルギーは凄い。私の心も諏訪御柱祭に今から心が奪われている。TMS研究会は法人会員が増えた事もあって、資金面では余裕はないけれども運営費に困らなくなり、明確にTMS研究会として旗揚げした。最近の講演会も年3回行われて、要旨集も体裁が整ってきた。このたびのISSN取得でこの要旨集が国会図書館に永久に保存される事は喜ばしい事である。講演者にとっても励みになるであろう。これからは、実質的な会員（会費納入のある）特に若手、を募り、運営も若手に委ねられるような研究会（若手の自由な発想、エネルギーの発露が本来のTMS研究会の目的）にさらに発展することを願うばかりである。